
CRIMSON COLOR COMICS
3
J-Girl.FIGHT



「くそっ…誰よアンタ！」
「忘れたかな？
まぁ覚えてないか…。
三年も前のことだしな。
お前は私の船から
1000万ベリーもの
大金を盗んでいったんだ。」
「さぁ知らないわね。
アンタみたいなマヌケな奴
山ほどいたから
いちいち覚えてないわ」



「いいねぇ。その威勢のよさ。」
「あっ……！」
徐々に快感が強くなっていく。
「あの時は色仕掛けでせまられて
あと少しでお前と
ヤレるという状況で
お前にだまされ
罠にはまってしまった。
あのときの悔しさときたらもう……」
「だ…だまされるほうが
悪いのよ！」



「まだそんなこという
　余裕があるんだな」
「あぅっ！」
（くっ…おかしい…
　こんなヘタクソな責めで
　気持ちよくなるなんて…！）
「ほらほら声も体もが
震えて来たぞ。
　おまけにココは……」
「あぁあっ！」
「ほらこんなグチュグチュだ。」
「卑怯者…！
　どうせクスリでも
　使ったんでしょ！」
「フフ…
　お前に卑怯者扱い
　されたくないいな」



かつて手玉にとった
矮小な男に
もてあそばれることが
悔しくてたまらないナミ。
「くそっ…や…めっ…あああっ！」
「そうそう
そういう声が聞きたかったんだ。
三年間たまりにたまった
うっぷんをお前の体で
はらさせてもらおうじゃないか。」
「ああっ…くっ…」


完全に身動きができないように縛られて
丹念に媚薬を塗りこまれていく。
「小賢しいお前でももう今度は何もできまい」
男のたまりにたまっていた欲望は
そう簡単にはおさまるものではなかった。
いたぶり続けて2時間以上経つが
いっこうにおさまる気配もなく
それどころか
徐々にガマンできずに色っぽい声をもらすナミに
ますます興奮し、
さらにねちっこく責めを重ねていく。


ナミの体は信じられないほど熱くなっていった。
「くっ…おねがい…許して…
盗んだお金だったら返すから…」
「ダメだな。いまさらもう遅い。
あのときワシが受けた屈辱は
金を返したくらいではおさまりきらん。
お前はもう一生ワシの肉奴隷に決定だ」
「そ…そんな！」



「肉奴隷としてまず
一発目を受けとれい！」
「ああああああああぁっ！」
「この三年間
もしお前を捕まえたら
どういたぶってやろうかと
100通りくらい
考えていたからな。
毎日毎日いたぶってやるぞ。
たのしみにしていろ」
「あああああああ
ああああああああああっ！」

低い振動音が聞こえてきた。それと同時に、胸の先にその振動を感じるリンス。
リンス「な、何……これ？　え！？」
男「お目覚めかね、リンスレット＝ウォーカー」
リンス「誰！？　どういうこと！？」
男「見ての通りだが、説明して欲しいかね？」
　そこは見知らぬ部屋だった。ベッドに縛り付けられ、身動きが取れない。
リンス「こ……これ以上おかしなことしたら、訴えてやるから！」
男「キミが警察に行けるわけがないだろう……あぁ、あったあった」
　男は、冷静な顔つきのまま更に道具を取り出す。
　それは、男性器を模したバイブレーターだった。
リンス「ひっ……やめてよ！　何するの！？」
男「もちろん、キミの愛らしい膣に挿入する以外の使い道はないね」
リンス「やだっ！　ちょっと……んあっ、やめてぇっ！！」
　男はリンスの股を押し開き、陰部にバイブをあてがう。
　ヴァギナはまだ異物を受け入れる準備ができていなかったが、
男に手抜かりはない。バイブにはたっぷりとローションが塗りたくられていた。
男「さぁ、咥え込んでくれたまえ」
リンス「痛っ！　はっ、入るワケないでしょ！？　やっ、やめ……
ンぁあああああ！！」
　膣をこじ開けて入ってくるバイブに感触に、リンスは快楽よりも
痛みと恐怖を覚えた。
　ほぐれていない膣道は、ただ圧迫感だけを伝えてくる。
リンス「っかは、はぁ、はぁ……んぐ！　ぬ、抜いて、抜いてよぉ……んくぅ！」
男「なに。すぐに気持ちよくなる……ほら」
　男がバイブのスイッチを入れた。乳首を襲う振動よりも激しい振動とうねりが、
膣内狭しと暴れ出す。
　陰核部分にも刺激を与えられるよう設計されたそれは、痛みと同時に
快楽も与えるようにできていた。
リンス「あがっ、くっ、んぁあああ！　いっ、ひぐ！　痛い、っくぅううっ！」
男「あぁ、痛みに歪む顔も美しいね……ずっと、その顔を見たいと思っていたよ」





リンス「あぁ、な、なんなのよ……
　あんた、いったいなんなの！？」
男「キミのファンさ。ずっとずっと、
　欲しいと思っていたんだよ……キミのすべてをね」
リンス「ふざけたことを……っくぅう！
　あんたなんかにやれる物は、ひとつもなっ……
　んあっ、はぁ、はぁ……ないわ！」
男「その気丈なところも素敵だよ……
　さぁ、膣だけではなく、尻の方にもあげようか」
リンス「なっっ！？　やめっ、やめてよぉっ！」
　リンスの懇願に耳を貸さず、
数珠繋ぎになっているパールを肛門に押し込んでいく。
リンス「あが……っく、あ。入る。お尻の中、
　いっぱい……あぁ、入ってくるぅぅ！」
男「美しい女性は肛門までもが美しい。
　私の目に狂いがなくて嬉しいよ」
リンス「やめて。も、もう入れないで……
　苦しい、っく。んん、んぅあああぁあああ」
　直腸にパールを押し込められる。
それは振動を伴わないが、
膣内で蠢いているバイブが粘膜の
皮一枚隔てた先からパールを揺すった。
リンス「抜いて、こ、これ、抜いてぇ！
　こんなの、おかしくなる……
　私、駄目になっちゃうっ！」
男「いやいや、キミなら大丈夫さ……



男「これから商談があってね。少し席を外すが……
なに。寂しくないように、私のペットを
置いていくから安心してくれたまえ」
リンス「ペット！？　なによそれ、
その前にこれ外していきなさいよ！？」
男「それはできない相談だ……
そのかわり、目隠しをしていってあげよう」
リンス「意味が分からないわ！？」
半狂乱の悲鳴をあげるリンスに、
男は微笑みながら目隠しをする。
男「それでは、存分に楽しんでいてくれたまえ」
リンス「いや！　怖いっ、何！？
なんなのよぉおっっ！！」
フハッフハッ――
リンス「ひいっ！　な、何？　何がいるの！？」
荒い鼻息が聞こえてきた。
そして、ベッドに登ってくる。
目隠しをされたままのリンスには
分からないことだったが、
それは大型の雄犬二匹であった。
リンス「こっ、来ないで！　来るな！
あっ……きゃあっっ！！」
犬「ハッハッハッハ」
犬たちは慣れているのか、
リンスの叫びにもたじろぐことなく近寄り、
その素肌を舐め始めた。
リンス「きゃぁああっっ！！　何！？
やだっ、犬！？　嘘っ！　やめてぇっ！」
柔らかく旨そうな脇腹を、
肉の詰まっていそうな太ももを。頬を、首筋を、
乳房を、足先を舐め回す犬たち。
リンス「いやっ！　こんなのイヤぁあああああ！！」
目隠しをされたことで、犬たちの行為を
肌で感じるリンス。ざらついた舌に
身体中を愛撫されて身をよじるが、
犬たちは舐めるのをやめようとしない。
リンス「あぁああ、あ、あ……
いや、誰か、助けて……！」



リンス「あっ、あぁあ！　来るっ、
　また来るぅう！」
男「はぁ、はぁ、いいですね。
それでは、私も一緒にイかせて
いただきましょうか！」
リンス「来て……来てっ！」
男「そぉです！　もっと懇願しなさいっ！
　私の精液をぶちまけて欲しいと！」
リンス「いいわ。もう、いい……中で出して！
私のマ●コの中に、あなたの
精液ぶち込んでっ！」
男「おぉお、お、お、お、ぉおおっ！」
リンス「来てっ、来てぇ……イかせてぇえっっ！！」
ビクンッ――ビュクビュククックッ！！
男が激しく突き込んだのと同時に、
膣内が熱いもので満たされていく。
リンス「あ――ッッッッ！！！！」
まるで犬のようなうなり声を発し、
何度も何度も腰を打ち付けてくる男。
その精液が膣内を、さらには子宮にまで
染み込んでいく。
リンス「はぁ、はぁ、はぁ、はあぁ……
んぁあ、妊娠……しちゃ、う……ぅう」
男はペニスを抜かず、また体勢を立て直す。
男「どうせなら、確実に妊娠するまで
注ぎ込んであげましょう……
もちろん、あなたもそうして
もらいたいハズですよねぇ？」
リンス「……は、はい……お願いします」
リンスにはもう、懇願する以外の道はない。
リンス「妊娠するまで、精液を注ぎ込んで
くださいい……イかせてくださいぃい」
男「仕方ありませんねぇ……ふはははははっっ！！」
男の哄笑にももう、何も感じることはなかった。



砕蜂「なっ、なんなんだ貴様たちは！　放せ！」
女「なんなんだ、はないでしょ？
せっかく可愛がってあげようと思ってるのに」
砕蜂「何が可愛がるだ！
私を誰だと思っている！」
女「だからぁ、砕蜂でしょう？
私たちと同じ、レズビアンの♪」
砕蜂「な！？　あぁっ、
どっ、どこを触って……ンンッ！」
薄手の装束であるのをいいことに、
女たちは砕蜂の肌に手を伸ばしてきた。
服の隙間から手を入れ、
初手から容赦なく秘部を責める。
砕蜂「こっ、この痴れ者どもが！
誰がレズだ、誰がっ！」
女「あら。だってあなた、
先代様に懸想していたんでしょう？」
女「ええ、有名よ。あなたが夜一様に
付き従っていたのは、夜のお供も
していたからだって」
砕蜂「私には、いや、夜一様にも、
そのような趣味はない…っ！」
女「またまた。そんなこと言って……
ココは正直よ？」
砕蜂「んっく！　よせ！
そんなところを触るな……
んんっ、くふ。んくぅっ！」
一人はあまり肉厚のない愛らしい乳房を。
その先端の乳首をくすぐり、摘み上げる。
一人は股間へと手を伸ばし、
下着の上から女性器を撫で回す。
もう一人も同じく股間へと指を這わせ、
にやにやと舌なめずりをしていた。
女「とにかく、せっかくだもの。
一緒に楽しみましょうよ」



女「さぁ、そろそろ脱ぎ脱ぎしましょうね〜〜っ」
砕蜂「や、やめろ……
　私にその趣味はないと……っく」
女「はい、ご開帳〜〜！」
女「あはは！　可愛いおっぱい！」
砕蜂「んくっ！　よっ、よせ。そこは……あぁあっ！」
女「あら、もう濡れてるんじゃない？」
女「私たちの愛撫で感じてくれたのね。嬉しいわ」
砕蜂「くそ、くっ……んんぅ！　あぁ、やめっ！
　触るなぁ……っ！」
　女の指が、砕蜂の一番敏感な部分に触れた。
下着の隙間から指を這わせ、
ねっとりとした感覚を与えながら陰核をくすぐる。
砕蜂「ひゃっ！　あ、っく。そ、そこは、
　貴様たちのような者が触れていい場所では……
　ぁあんっ、くふっ。ンン！」
女「私たち以外の誰が触れるのよ。
　どうせ男に興味ないんでしょ？」
砕蜂「馬鹿なことを……んんっ、く。あぁ、やめっ！」
　女が陰核の包皮をめくり上げる。
　剥き出しになった粘膜の小粒が下着に擦れ、
砕蜂の淫欲に衝撃を走らせた。
女「ふふふ。染み出てきた染み出てきたっ！」
砕蜂「あぁ……だ、駄目だ。そんな……っく」
女「お尻も張りがあって羨ましい。それにほら
……菊門も、キュッとしてて可愛いわ」
砕蜂「あぁあぁあっっ！！」
　女の指が、肛門に触れた。そして、
突っ込まんばかりに押し当ててくる。
砕蜂「やめろっ！　そんなところまで……
っく！　あぁ、お、お尻はっ！」
女「あら、お尻が性感帯？　可愛いぃ〜♪」
砕蜂「違っ、く……ンン。ひあっ！　むっ、胸を、
抓る、な……んぁあっ！」
　乳房を弄っていた女も、股間を愛撫する二人に
負けないようにと刺激的な攻めを繰り返す。
全体を荒々しく揉みほぐし、尖端を摘み、転がす。



砕蜂「っくはぁ、はぁ、はぁ……あぁ。も、もう……」
女「あぁ、ごめんなさい。いつまでもくすぐるばかりじゃいけないわよね」
女「はぁい。それじゃ、脱ぎ脱ぎしましょっ」
砕蜂「あぁ……駄目。み、見るな……やめろぉ……ぁああ」
下着がはがされる。同時に、秘部に溜まっていた愛液が滝のように流れ出した。
女「ふふふっ、凄い量……いい匂い。素敵な愛液だわ」
女「こんなにたっぷりで。ほら、もうおまんこユルユル」
砕蜂「あぁっ！　やっ、ひゃ！　触るなっ、指を、あぁ、指を入れるな……あぁああ！」
砕蜂の尻を高く上げさせ、女性器を視姦する女たち。
しかしすぐに見るだけでは物足りなくなり、指を這わせ、舌を伸ばす。
砕蜂「あぐっ、くぅ……んぅう！　こ、こんな屈辱的な格好……許さぬ、許さぬぞ」
女「あら。まだ強がれるのね。さすがは二番隊隊長様だわ」
女「でも、嫌がる子を無理矢理イかせるのも楽しいわよね……ぺろっ」
砕蜂「やめろ。口づけなど……んじゅっ、っぷふ。んん、ちゅぷ、ふっ、んぅう」
重ねられた口から唾液を流し込まれる砕蜂。その息苦しさに眩暈を起こしたかと思うと、陰部からの刺激で覚醒する。
女「見て、このおまんこ。ヒダヒダも少なくて、とっても綺麗」
女「お尻だって、キュッとすぼまってて可愛いわよ。ほら、指一本でもキツキツ」
砕蜂「んぐっ！　じゅぷう、っちゅ、んぅ、ぅうぅっ！！」
膣に、直腸に、指が挿入された。押し込まれた指が内部で蠢く感覚に、砕蜂は憎悪と快感をない交ぜにする。
砕蜂（許さん許さん許さんっ……あぁあああっ！！）
陰核を摘まれ、全身に官能の電撃が走り回る。
陰毛を引っ張られ、こそばゆさに身をくねらせる。
砕蜂（私は、こんなことで屈したりしない。感じたりなど、しない……っ！）
舌を吸われ、唾液を啜られ。乳首を抓られ、乳房を揉まれる。
砕蜂はそれでも屈しまいと抵抗する。しかし心とは裏腹に、身体はすでに快楽の虜となっていた。









乱菊「……くっ！　放せ！
　放しなさいと言っているのよ！」
男「いやなこった。せっかく憧れの乱菊さんを
　捕まえられたんだからな」
男「そうそう。その巨乳。たまらねぇよ」
　後ろ手に縛り上げた乱菊を羽交い締めにする。
その手は、早くも乱菊の乳房を揉みしだいていた。
　男の攻めは、最初から乱雑であった。
愛撫などという優しいものではなく、
ただひたすら己の欲望を満たすだけの行為。
　その豊満すぎる乳房を揉みほぐすのではなく、
鷲づかみにする。乳首を抓り、
摘み上げてその感触を楽しむだけ。
乱菊「痛っ……んっ、放しなさい！　っく、うン！」
男「くはーっ。デカくて柔らかくて最高だな」
乱菊「やめろと言ってるのよ！　つっ、摘むな
　……んっく、あう！」
男「デカいくせに敏感か……
　ますますたまらねぇぜ」
男「お、俺にも揉ませろよ」
　前に立った男たちは、乱菊の顔よりも
乳房を見つめながら喘いでいた。
その獣じみた息づかいが、乱菊に嫌悪感を走らせる。
男「くくっ……震えてるのかよ？
　可愛いところもあるじゃねぇか」
乱菊「くっ、も、もういい加減に……
　きゃっ、あぁあ！」
男「へへっ、声もたまらねぇぜ、乱菊ちゃぁん」
乱菊「んんっ……くぅ」
　乳首ばかりを責め立てるその行為に、
乱菊はマゾヒスティックな快楽を覚え始めていた。
乱菊（違う……あたしは、こんなコトで……）



わざと乱暴に衣服をはぎ取る男たち。
たわわな胸が、張りのある腰が、
その前にさらけ出された。
男「ヒュー！　見ろよ
。護廷十番隊副隊長殿の素っ裸だぜぇ！？」
乱菊「あんたら、それが分かっていて
こんなコトをしてるの！？
あたしが本気で怒らないうちに……」
男「無駄無駄。斬魄刀もない。鬼道も
使えない状態のあんたにゃ、何もできやしねぇよ」
男「俺たちに犯されること以外にはな！くははっ！」
乱菊「くっ……」
手を縛られているだけではない。
身体の自由が利きにくいのは、何か薬でも盛られたか、
それとも縛道か。
乱菊はまだ自由の利く目に、怒りと憎悪を乗せる。
しかし、男たちはその視線にさえも欲情していた。
男「おぉ、怖い怖い……でもよ、
いくら怖い顔したところで、
素っ裸じゃ余計にソソるだけだってーの」
男「でもよ、
すぐにそんな目すらできないようにしてやるぜ」
乱菊「なっ！　はっ、放しなさい！」
両脇から取り押さえられ、持ち上げられる乱菊。
運ばれた先にあったのは、三角木馬であった。



乱菊：「あっ！　いやっ、
あぁあああぁあぁあっ！」
吊し上げ、木馬をまたがせる。
暴れる脚を押さえることなど
赤子の手をひねるようなものだった。
男：「おほーっ。割れ目にぴったり
と食い込んでるぜ」
男「こりゃあ、
たまらねぇ見せ物だな、くはははっ！」
乱菊「こ、このあたしにこんな……っ
く、今すぐ下ろしなさい！」
男「あんたのその気の強さが、
いつまでもつか楽しみだぜ」
乱菊「フン。この程度の責めで、
あたしが屈服するとでも
思ってるの？」
男「くくく……それじゃあ、
これでどうだい？」
乱菊「え？」



男がスイッチを入れると、木馬が振動し始めた。
低い振動音が狭い石壁の部屋に響き渡る。
乱菊（なっ、何よこれ！　こんな……
　んっく、すごい、し、痺れる……ンンッ）
男「お楽しみはこれからだぜ」
乱菊「あぁあっ！　だ、駄目。食い込む……
　んっ、くぅ！　くは、はぁ、はぁっ」
　動けば動くほど、自らの重みで
木馬が食い込んでくる。
ヴァギナを割り、クリトリスに達した角が、
乱菊の官能を激しく震わせた。
乱菊「きゃっ、ぅあっ！　だっ、駄目、
　いや、これっ……あぁあああぁあっっ！！」
男「気に入ってもらえたようだな」
乱菊「っくぅ！　馬鹿な、こと……
　いっ、言わないでっ！　あ、あっ……っくぁ！？」
　もっとも敏感な部分を襲う振動が波を打った。
　同時に、乱菊の腰があまりの官能に跳ね上がる。
男「振動の強さも変えられるんだ。
　なかなかオツなもんだろう？」
乱菊「あ、ふっ、ンッ、くうっ！
　うぅ、こ、この程度で……んんっ、う、ぅう」
男「さすがに粘るねぇ……それじゃあ、
　俺たちが手伝ってやるよ」
乱菊「え？　な、なにを……やめっ！」
男「へへ。乱菊さんの素肌ぁ」
乱菊「やめろ。触るなっ……くはっ、やっ、あぁあっ！」
　身動きの取れない乱菊に男たちがまとわりついた。
　たわわな乳房を、そそり立った乳首を。
三角木馬に割られている股間や尻を。
男たちは舌なめずりしながら撫で回す。


乱菊「あぁ、はぁ、はぁ、さ、触るな、い、今、触られたら……んんっ、ふあぁあっ」
男「おやぁ？　どうかしたんですかぁ？」
男「乱菊さんほどの人が、責められて感じちまってるんですかぁ？　くははっ！」
乱菊「くっ……そんなコト、な……ンンッ！　や、やめろ……あぁあ、っくぁあ」
男「く〜〜っ。このデカパイ、最高だぜ。乳首もこんなにツンツンでよぉ」
乱菊「きゃうっ、くっ！　引っ張らないでよ、あぁ……とっ、取れるぅ！」
男：「おっと。それじゃ、優しくしてやるよ……じゅるるっ！」
乱菊「ひっ、ひゃふ、あっ！　な、舐めないで……胸、感じすぎて……ぁああ、ひあ」
陰部を襲う振動の波。尻を撫で回され、乳房をしゃぶられる。
全身からの快感に乱菊はまた官能を強め、下腹部を熱くする。
息を荒げ、こそばゆさと快楽に肌を震わす。



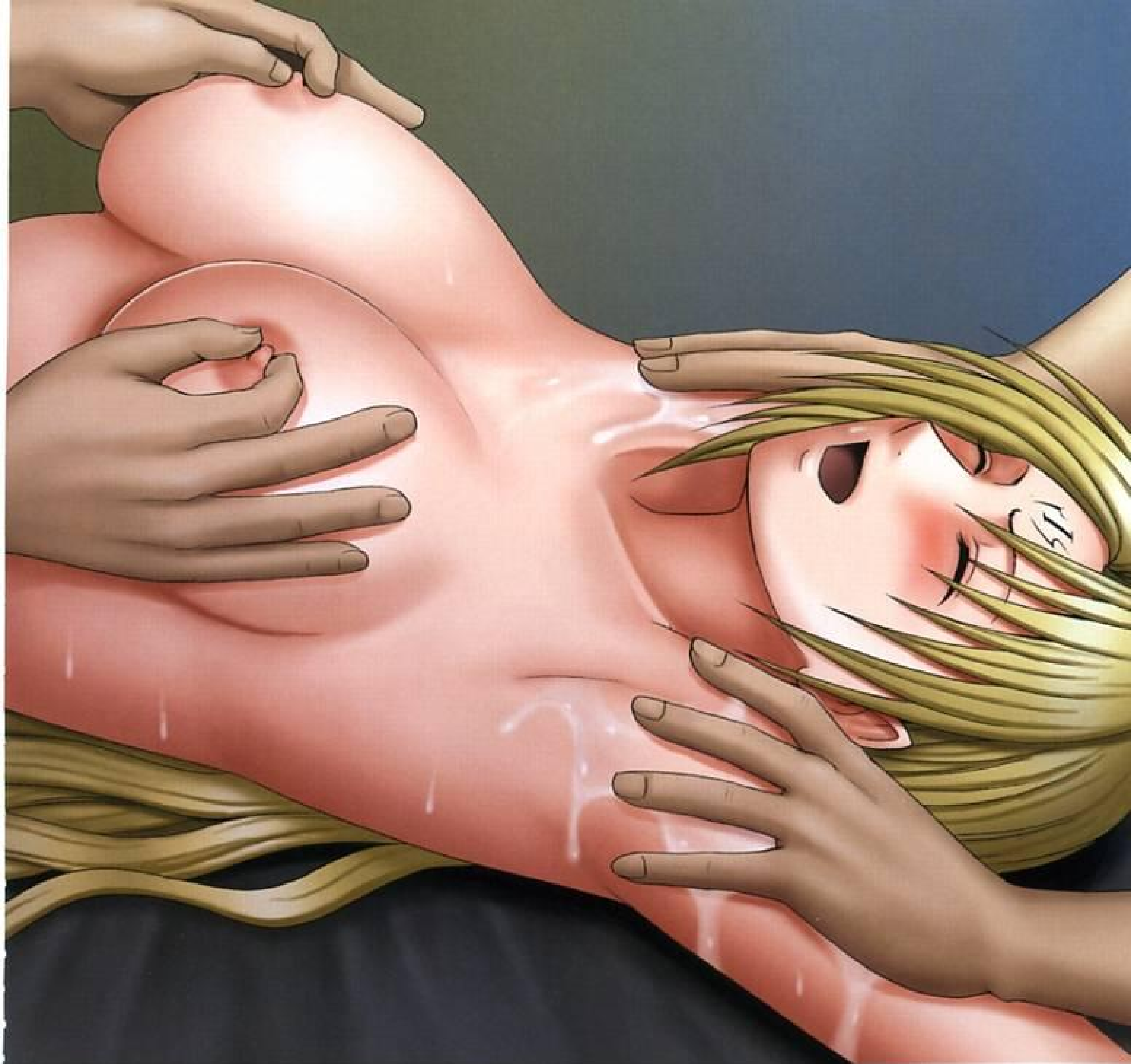
乱菊「あっっ！！　くっ、んぅ！
いっ、言うわ。言うから、
振動、強く、しないで……
あ、来ちゃう、来ちゃうぅぅうっ！」
男「早く聞かせてくれ。
そのキレイなお口でよぉ」
乱菊「あ、あたし……
あたしの……っ」
男「なんだよ」
乱菊「あたしのマ●コに、
そのぶっといチ●ポ
ぶち込んでぇっ！！」
男「くははっ！」




「セフィリア＝アークス…この世で最も強く、
気高く、そして美しい女…」
「こうでもしないとあなたと遊べませんからねぇ…ククク…」
「だ…誰ですか！あなた達は！？」
「さぁ　みなさん。パーティの始まりですよ」



「いやぁ…今日のご馳走は格別ですなぁ」
「く…あ…何を…！」
仮面をつけた男たちが
ローションらしきものを塗りたくっていく。
「や…やめな…さい！」
「さすがはセフィリアさま…
　こんな状況でそんな命令口調な女は
　はじめてですぞ」
ただのローションではない、
強烈な催淫効果のあるローションだった。
はじめは冷静にこの状況を打開する策を
模索していたセフィリアだったが
ズンッと頭に響く快楽が思考を
邪魔しはじめた。
「こ…これは…何……ああッ！」
「足がピンとのびてますな…
　感じているのがまるわかりですぞ」
「そ…そんなっ！
　か…感じてなど…ぅ…ッ！」
「足のつま先まで反り返らせて…
　女が感じてる反応はごまかせませんなぁ」
「ち…っ…ちがい…ます…っ！んっ！」



「どれ…ここは念入りに塗っておきますか」
「や…やめ…ぅあああっ！」
怪しく光る乳房を優しくつかみながら
乳首の先端へとローションを塗り上げていく。
「いったいこれは…誰の…しわざ…
ああっ！あああっ！」
「余計な心配はしなくていいんですよ
セフィリアさま」
「我々はただあなたの体で遊びたい…
ただそれだけなんですからね…ククク」
「ん…くっ…何を…！」
「ほ〜ら立ってきた立ってきた」
「ひゃうぅぅ！」



「さて…そろそろココにも…」
「あああっ！」
ローションを粘膜に塗られると
性感帯をむき出しにされたかのように
感覚がするどくなっていった。
「ほほぉ…ヒクヒクしはじめましたな…」
「あのセフィリアさまがイク瞬間…
見てみたいですなぁ」
「んっ…くっ…！そ…そんなこと…
私は決して……！」
「ここまでやったら
もうチョイチョイッと触っただけで…」
「なっ…や…やめっ…あぁっ…くぅぅぅッ！」
（ダメッ…まさか…そんなっ……！）
「あああああああああああああっ！」



「いつも凛としたセフィリアさまの
女としての本性を見れて最高ですな」
「はぁ…はぁ…はぁ…………」
今度は拘束台の上半分がせり上がり、
イスのような状態になった。
「くっ…こ…こんなこと…
いつまで続けるつもりですか……」
「ククク…いつまでも続けますよ…こ
こまでするのに随分お金が
かかりましたからね…」


「うあああっ！　あああぁぁあああぁッ！」
「ひいいいっ！　いぎぃいいっ！」
「おおっ？今イッたんじゃないですか？」
「またイキましたよ」
「や…やめな…さ…あああああっ！あああああああああっ！」
しゃべる間も与えないほどの連続強制絶頂…。
性的拷問には慣れていないセフィリアは女を熟知している中年男たちの色攻めに
耐える術をもっていなかった。
「ああああああっ！やぁあっ！あああああああぁぁああっ！」
「ちょっと手加減してほしいですかセフィリアさま？」
気高いセフィリアにとって情けをかけられることはあまりに屈辱的で
何も言い返すことができなくなってしまった。
「そうですか？もっともっとイカせてほしいってことですね？」
そう言うと　男たちは思い思いのオモチャをとりだした。
「……！」



すでに快感で震えている体に
さらなる快感を
ひきずりだすための
バイブレーションが
襲ってくる。

「うああああああっ
…ちょっ…待って…
あああああぁぁああっ！」
（ダメ…強すぎる…！
これは…耐えられない…！）
快感を与えるためだけに
つくられた玩具が
どうしようもないほどの
淫撃をセフィリアの体に
打ち込んでくる。
「やっ…やめっ…あああああっ！
も…もう…ダメ…あ
あああぁあああっ！」
（な…なぜ…
こんなことに…！？）
「それじゃあ入れますよ？
いいですかセフィリアさま？」
「くふっ！だ…ダメ…です…！
んんっ！やめな…さい…！」
もう何も手を触れていなくても
喘ぎ声をもらしてしまうほど
体には快感が充満し、
頭が真っ白になっていた。
ズブッ…！
「ああああああああっ！」



「こんな状態でも
まだ『やめなさい』だなんて…
さすがはセフィリアさま。」
「それでこそ
犯しがいがあるというもの…」
「ああっ…！あっ！あああッ！
絶対に…んんっ！ゆる…
くぅうっ！…しま…せんッ
…あああっ！」
「まあ時間はありますから
ゆっくりと楽しんでくださいよ」
「私は三番目ですな」
「ははっ…すいませんね…
それではこのまま
ゆっくりじっくり…」
犯されている女の抗議など
まるで無視して
欲望を吐き出す順番の
確認をする男たち。
その余裕ぶりが
余計にセフィリアに
屈辱を与えた…。
(ダメェ…こんな…
見知らぬ男性の…
モノなどで…私は…！)
「あああああああ
ああああああぁあああっ！」




目を覚ましたリナリーは上半身裸にされていた。
あわてて胸を隠そうとするが右手は背中に、
そして左手は左足に縛りつけられ
身動きがとれない。
（な…何？これは…？）
誰かが背後から寄ってきてそっと乳首を触る。
「やっ…！誰？」
焦ったリナリーは立ち上がって逃げようとするが
片足を縛られた状態ではうまく立ち上がることもできず、
そのまま布団に倒れこんでしまった。


「くぅっ……！」
「やぁリナリー　僕が誰だか分かるかい？」
「だ…誰？あなたは…？私をどうしようというの…？」
「やっぱり探索者の顔なんていちいち覚えてないか…。
でも僕はずっとリナリーのこと見てたよ。
ずっとリナリーのこと想ってたんだ。」
「探索者(ファインダー)？教団の人間なの？
だったら何でこんな…！？」
「もちろんひどいことはしないよ…
でも今日からはリナリーは僕のモノだ」
「な…何を…！えっ…？やっ！」


「だ…ダメ…そんなところ…！」
「ああ…やっとリナリーが僕のモノになる…」
リナリーの細く美しい曲線を描く
脚を撫で回しながら股間に顔をうずめてくる。
「ダメ！おねがい！やめて！こんなこと…こんなことしたって
私はあなたのモノになんかならないわ…！」
「フフ…なるさ…してみせる…」
そういうと男はショートパンツをずらし指を入れてきた。


「はぁうッ！」
「知ってるよ…リナリーが男性経験がないってことも…
こういうことされるの…初めてでしょ？」
「……っ！」
「大丈夫…僕ならリナリーを気持ちよくさせてあげられるよ。」
クチュクチュ
「あああっ！ちょっ…待って…ああっ！」
「ほらね…気持ちいいでしょ？ほらほら」
「ああっ！違う…！ダメ！お…おねがいだから…もう…！」
「そんなに気持ちいいのかい？じゃあもっとしてあげるよ」
「やっ…あああっ！」
（ダメ…この人…もう何を言っても…）



興奮してきた男はショートパンツを
ムリヤリ引きちぎり、腰を引き寄せ
思うがままにリナリーの股間を弄び始めた。
「あっ…あふぅ…やめっ…あぁっ！」
「お尻の穴もキレイだね…想像したとおりだ…」
「えっ…何…！あっ！うぁあああぁっ！」
「反応は想像以上だ…
　敏感なんだねリナリー…フフフ」
「やぁーダメェ…！抜いて…！あああっ！」
肛虐バイブを入れられたまま
クリトリスを優しくなでたりつまんだり…、
リナリーの恥ずかしい地帯は
見知らぬ男の欲望に完全に占領されてしまった。



「さぁいよいよリナリーが
完全に僕のものになる瞬間だ…」
アナルにバイブを入れたまま
両足首をつかんで大きく開かせた。
「だ…ダメ…!ダメ!ダメ!」
(うそっ…イヤッ!誰か助けて!
誰か…!)
「あああああっ!」



「ひとつになれてうれしいよリナリー…。リナリーも嬉しいだろ？」
「こ…こんな…ひどぃ…っ…ああっ！ああっ！」
「フフフ…僕無しじゃいられない体にしてあげるよ」
「ああっ！あっ！んっ！んんっ！ああっ！
ああああああああああああああああああっ！」





